

2017年度（平成29年度）上智大学 学部学位授与式 式辞

上智大学長 曄道佳明

2018年（平成30年）3月26日

本日上智大学を巣立つ日を迎えられた皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、ご父母並びにご関係の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

入学時に、本学で学ぶという共通の目的を持ちキャンパスに集った皆さんが、本日、上智を巣立ち、それぞれの進路に歩を進めることとなります。4年間の学生生活を共にした皆さん一人一人が、それぞれの道を選択し、社会に飛躍するということは、私たちにとって感無量の一言に尽きる喜びであります。

私たちは、人生のそれぞれの節目において次なるステージに向かうとき、期待とともに大きな不安を覚えるものです。私の経験では、歳を重ねれば重ねるほど、この不安は現実的な視点に立つものになるような気がします。それはなぜかと考えるとき、人生は一度きりであるという観念が強くなるからであろうと思うのです。皆さんはいかがですか？今、学生生活を終え社会の中により直接的に属する、それは組織を意味するかもしれませんし、独立を意味するかもしれませんが、全く新たな立ち位置に直面して、どのような感慨をお持ちでしょうか？少なからず不安があるかもしれません。この不安をどう払しょくするかに頭を悩ませている方もおられるでしょう。

人生は一度きりですが、その人生を比較する“何か”は存在し得ません。どんなに歳を経ても、もう一つの人生を比較することはできないのです。私たちは、節目、節目での自分の選択を信じ、その道に邁進し、やがて立ち止まり、場合によってはその歩みに修正を試み、というプロセスを繰り返しながら人生を形成していきます。すべての人にとって、個性が発揮されたこのプロセスには成否はありません。そのプロセスを経て成し得た人生は、誰も批判、批評することはできません。それは皆さんにとっての作品であるからです。

唯一、もし悔いる人生があるとすれば、それは社会への、あるいは他者への貢献をないがしろにした人生ではないでしょうか。私たちの社会は、時に他者を頼り、時に他者を助けることで成り立っています。“生きる”とは、他者と自分との相互関係に“自分らしさ”を持たせることであらうと思えます。先ほど、カトリックセンター長からマタイによる福音書の一節(注)が紹介されました。「最も小さい者の一人にしたことは私にしてくれたことなのである」という教えは、悔いぬ人生の形成に大きな示唆を与えてくれています。皆さんの他者への思いや視点は、最も小さい人に注がれているのでしょうか？社会の中に生きるとき、自分自身の行動にしか心配りができない、余裕がない時期もあるかもしれません。しかし、福音書にあった用意されている国、天国

を受け継ぐことができる資格は、社会での地位や名誉ではなく、皆さんの人生のプロセスの中に、どれくらい他者への思いが込められているかにかかっているのです。

どうぞ、上智大学の教育精神を常に心にとどめてください。Men and Women for Others, with Others. この言葉は、他者への貢献を呼びかけているだけでなく、いずれ人生を振り返るときに、皆さん自身に充実感、幸福感を与える人生の本質を表しているのです。

ご卒業、誠におめでとうございます。

(注)

マタイによる福音書 25章 34b~36節、40節

[そのとき、イエスは弟子たちに言われた]

「王は言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」